町民文芸

只見短歌会　六月詠草

大塚栄一　指導

出詠をやめたる今も枕辺に小さき鉛筆とメモ帳を置く　古川　英子

長き友に弔辞託せど先立たれ老い母夜半に弔辞書きをり　新国由紀子

夏風邪に耐へて己の粥を炊く一人居続き気も弱まりぬ　馬場　八智

出づる日と共に動けばなにがなし善き一日と心安まる　小倉キミ子

今流に物片づけるを断捨離と我れ励み見る物捨て難し　関谷登美子

待ち待ちし雨降りたれば野菜みな萎えし葉広げ一夜に色増す　渡部ゆき子

児童等の踊りの途中楽止まれどをどり続けるに歓声あがる　目黒　富子

雨降りの長く続けば草伸びてマリーゴールドの花おおいたり　渡部ヨリ子

聳え立つ真向かひの山抱くごと雲悠々と碧空移る　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　七月例会

目黒十一　指導

食細くなり来る母や夏来たる　修一

青嵐肉体使い切りし母　味代子

笹干して土用の入の日の眩し　一穂

梅雨の夜や歯間ブラシの刺激痛　恒夫

パラソルや木の葉がくれに舟あそび　吉児

籐・手鉤童の頭に水眼鏡　礼

臨終の母に添い寝の梅雨さなか　信

スイカ食む何こともなく日々ありき　夏蕨つまめば山に居る思ひ　順子

民泊の靴並びをり田植歌

君の逝く後ろ姿や青田波　都

真夜中の寝返り幾度青葉木菟